

令和5年度 第1回 総合教育会議 会議録（要約）

期 日	令和5年8月1日（火） 14時00分から15時30分
場 所	雲仙市役所別館 3F 会議室1～3
出 席 者	市長 金澤秀三郎市長 教育委員会 大津善信教育長、駒田義弘教育長職務代理者 仁禮智加子委員、永岡悦子委員、江川儀平委員
事 務 局	市長部局 柴崎総務部長、佐々野政策企画課長 教育委員会事務局 小松教育次長、富永総務課長、中村学校教育課長 林田生涯学習課長、草野スポーツ振興課長、石川生涯学習課主査 森田総務課課長補佐（記録）

会議日程

- 1 開会
- 2 市長挨拶
- 3 議事
(1) 市民のニーズに応じた図書館・図書室運営の充実について
- 4 その他
- 5 閉会

【14:00開会】

1 開会

2 市長あいさつ

金澤市長 本日は、第2期雲仙市教育振興基本計画の主要施策に掲げる、市民ニーズに応じた図書館・図書室運営の充実について、をテーマとして協議を予定している。本市における図書活動については、生涯にわたって学べる環境づくりの一環として、雲仙市図書館及び各図書室を設置し、オンライン蔵書目録検索システムによる利便性の向上や、図書ボランティアによる本の読み聞かせ、移動図書館車の巡回など、多くの市民の皆様に、本と触れ合う機会をつくり、生きがいに繋がる活動を目指して取り組んでいるところである。委員皆様の考えや思いを発言いただき、意見交換ができればと考えている。

3 議事事項

市長の指名により小松教育次長が議事進行を行う。

議事（1）市民のニーズに応じた図書館・図書室運営の充実について

※事務局から、（1）市民のニーズに応じた図書館・図書室運営の充実について説明する。

小松教育次長 これより、皆様から順に意見をいただく。駒田委員、お願いしたい。

駒田教育長職務代理者 図書館・図書室というのは、本を借りたり読んだりするところであるというのがごく普通の考え方だろうと思う。図書館・図書室を利用する人の全国的な割合を見ると、2割から3割だという話を聞いたことがあるが、今日の議題にあるように、市民のニーズに応じた図書館・図書室運営というのは、図書の貸出しだけでは無い。先ほど図書館法の定義で説明していただいたが、その本が好きで、図書館を活用してくださる2割3割、その方以外にも沢山、図書室・図書館を利用して頂きたい。

仁禮委員 私の今までの人生を振り返ると、小学校はすごく本を借りていたが、中高生になると勉強や部活が忙しくなり、図書館・図書室、学校の図書室さえも行かなくなった。子どもが生まれると、子どもと一緒に絵本に触れる時間をたくさん作り、よく図書館に行っていた。

SNS等で読み物を読んだりしているので活字離れとは言えないと思うが、図書館には足

が遠のいているのを実感している。図書館に出向かせるために自己分析等色々考えたが、武雄市の図書館がすごく魅力的で、本を借りるためだけのスペースではなく、付加価値を付けられており、そこにお茶をしに行く。お友達とお話をしに行く。その待ち時間に本をちょっと読んでみようかな。面白い本があったら借りてみようかな。そのような感覚を持って、図書人口を増やして行かなくてはならないのではないかな。

永岡委員 市内の利用者数を見たときに、各地区の人口と関係があるのかと思った。

近隣市比較の貸出冊数で、1度の貸出し冊数の上限は雲仙市が10冊ということであるが、他市と違って半分位の数のようで、その理由をお聞きしたい。

先日、愛野図書館に行ってきたが、愛野図書館はとても明るく色々な本があった。小さいお子さんでも来られるようなスペースもあり、また、書棚のすぐ横に椅子があり、そこに座って少しでも見る事が出来るよう工夫がなされ、とても良いと思った。

江川委員 年齢別利用状況のグラフを見ながら改めて感じたが、20代が低くなるというのは分かる。もう一つ「なるほど」と思うのは、特に小学校低学年の子どもたちや保育園の子どもたちが、読み聞かせを楽しみにしており、先生が聞かせてくれるのを子ども達がとても楽しみにしている。もちろん外部のボランティアの方が読み聞かせをして下さることもある。

保育園から小学校の低学年の時にどれだけ本に親しませるか。そういう環境をつくっていかけるかというのは、この読書人生の中に大きく影響するのではないかな。

そういう意味では、雲仙市のこれからの読書環境の充実、図書館運営の充実といった観点から見ても、その環境づくりをどれだけ推進し工夫して行くかと言ったところを深めて行けたらいいのかなと言う様な感想を持った。

大津教育長 利用者数の資料であるが、これは多分常連がおられると思う。

そういう「常連を増やす」のか「新規の方もどんどん増やしていくのか」いろんな作戦があるかなと思う。

堀江貴文さんが、八女の出身らしく、お父さんお母さんは働いており田舎であるため刺激も少なかった。幼少期にたまたま家にあった百科辞書を読んでいたらしく、色々な分野を読み、それが自分の基礎になった。後々関連で話そうと思うが、幼少期の頃からの積み重ねというのは、色々生きていくのだなと感じている。

金澤市長 分からない所を教えて欲しいが、新聞紙上で地方交付税をそのまま図書購入費に充てて無いと言う指摘があった。雲仙市の現状はどうなっているのか教えてほしい。

富永総務課長 財政課に問い合わせたところ、本市の場合交付税として算定されている額

の大体9割程度は予算化されているということだった。

金澤市長 「近隣市比較の貸出指数」資料の南島原市の蔵書数が、何故突出しているのか分かれば教えてほしい。

石川生涯学習課主査 確認が出来ている所と出来て無いところがあるが、南島原は図書館自体の規模が大きく、置ける本の数がすごく大きいことを南島原市の館長から聞いている。また、予算を見ていただくと本市とほぼ変わらないことから、今まで購入した本を大事に使っておられるということも考えられる。

金澤市長 移動図書館の利用について結構利用があるようだが、これは別に雲仙市だけに限った状況ではないのか。

石川生涯学習課主査 移動図書館は、半島3市の中で実施しているのは雲仙市だけであり、諫早市も実施しているが、県内でもかなり珍しい方と聞く。五島市などの離島地域でも実施されているようである。

金澤市長 市民1人当たりの図書費で、雲仙市で310.03円とあるのは、分母は人口と思うが分子は何か。

石川生涯学習課主査 図書購入費に対して、人口で割って1人当たりを算出している。

金澤市長 電子書籍というのは、どうやって返却するのか。

石川生涯学習課主査 電子書籍は、図書館から借りられる期間が決まっており、1人1冊しか借りられない。システムの返却ボタンを押せば返すことができ、期限が到来すると自動で返却されることとなる。

金澤市長 例えば、自分のパソコン等に借りた際、その画面に返却ボタンが付いているのか。

石川生涯学習課主査 そういうことになる。インターネットのストアに近い感じになっている。現在、長崎県の電子書籍を借りる際は、自身のスマートフォンでマイナンバーをかざすと借りることもできるようだ。

金澤市長 各学校に図書室があるが、学校の図書はこれとは全く別なのか

石川生涯学習課主査 これは、市の図書室・図書館のみの冊数になっている。学校図書の冊数は含まれていない。

小松教育次長 先ほどの委員からの御意見の中で、いかに小さいうちに本に親しむ関係を作るかという御意見があったが、学校で例えば読書活動についてどういうふうな取組をされているのか説明をお願いしたい。

中村学校教育課長 学校における、読書・図書教育に対しての取組だが、地域の図書読み聞かせボランティアの方々が、おおむね月に1回程度、朝の時間、教室での読み語りをして下さっていた。

読書に関しての学校の取組だが、これは教育活動の一環として行っている。

スクールサポーターという学校に配置をしている読書に関しての支援を行う支援員が、図書室の環境整備等を行っている。

私たちとしては、毎年、子どもたちの読書数の数字を把握しながら、学校訪問をした際には、読書の量だけではなく、年齢に応じた質の高い読書の指導をしていただきたいと言う事で、各学校に管理職を通じて、年齢の発達段階に応じた読書の指導をしているところである。

大津教育長 文科省が2017年に発達段階に応じた取組という資料の中に、一つ例示があった。0歳から3歳の時期を前読書期と呼ぶが、前読書期に絵本に興味を持ち始め、4歳から5歳の読書入門期に、1人で読書ができるようになるらしい。

そのように習慣づいたことで、6歳から8歳が、初歩の読書期、読書の楽しみに目覚めると、自発的に読書しようという気持ちが強くなる。6～8歳だと小学校の低学年で、多読期というのが9歳から12歳。子どもが自発的に読書をしているならば読書習慣が身についていると言える、とその資料の一部に出ているようだ。

ブックスタートぐらいから入っていき、幼児期の読み聞かせの頻度が高いほど、小学校1年での1人読みの頻度も高くなるという結果が出ている。

「鉄は熱いうちに打て」という言葉があるが、本当の鉄を打ち始めるのは、小学校のもう一つ上がる前というのがあって、またこの小学校は小学校で、友達の影響や先生との出会いとか、図書を読むきっかけというのが上がってくる可能性もあると思う。乳幼児期にどう関わるかというのも一つのポイントになるのかなと思ったところである。

小松教育次長 確かにブックスタートはどこの市も推進されているが、今教育長が言われたように、幼児期を対象にセカンドブックという取組をされている市もあるようだ。

幼児期にもう一度本を読む機会を設けてみるのもまた面白いのかもしれない。

他にこの関連でご意見はないか。

江川委員 長崎県高校生平和大使のリーダー的存在の田原なつみさん（吾妻町出身）は、小学生の頃から本が大好きな子であった。ちょっとした休み時間の時に広げて読むとか、そういった事ができる子どもだった。その礎となっているのは読書ではないか。本当にしっかりと読めることができる。語彙も小学校のときに培われたのではないかと思う。先程読書環境ということで物的な、例えば蔵書とかきれいな図書館とか、それもちろん大切だが、それを宝の持ち腐れにしないような読書環境を育てる人的な環境づくりも大切な要素になるという気がしている。

駒田教育長職務代理者 移動図書について思っていることをお話ししたい。移動図書というのは雲仙市の地理的条件や図書館・図書室が設置されている場所というのを考えると、本当に特色あるいい取組と思っている。学校も幼稚園も保育園もそれから高齢者施設も、社会福祉施設も非常に喜んでおられると思う。学校の子どもたちとか限られた人だけが利用するのではなく、近隣の人も遠慮なくその図書館号が来ている所に行って、貸出・返却をどんどんやってほしい。本を好きな人を増やすことと、今後好きな人を増やすために、移動図書館等も充実させていくのはどちらが先だろうか。難しいところだが、この議題にあるニーズに応えるという意味では研究していく余地もあると思っている。

林田生涯学習課長 今学校・保育園以外にも、公共施設の何か所かやっているが、この時間帯にこの学校・保育園におりますのでどうぞ市民の皆さんもご利用くださいというご案内をしている。しかしながら、まだ一般の方の利用がかなり少ないという状況である。

駒田教育長職務代理者 人が集まる機会とか、公民館とかに移動図書館号で行って、図書館・図書室の様子を紹介できればという思いはある。限られた予算の中で最大限にやっていく事が絶対に必要であるので、そういう意味でも、課題もあり、限界というものもある。

仁禮委員 子どもが小さい時に、幼稚園の施設を使った子育て支援をいろいろ回らせてもらったが、そこに移動図書が来たら、子どもが騒いだとしても誰も怒る人が居ない、みんなでこの本は面白かったとか情報交換もできる。私も図書館に子どもを連れて行くと、うるさいと怒られたことがある。いろんな方がいるから、図書館で静かにすることを教えるのも大事なのは分かるが、子どもが元気で喋るのは当たり前なので。この間、ニュースで喋ってもいい日をつくった図書館が

あるというのを見た。それも面白いと思って、雲仙市で取り入れられたらいい。

小松教育次長 私も本で見たが、休館日を利用して、例えば落ち着かなくて静かに出来ない子どもたちを寄せて本を読む機会を作った図書館があるという事を聞いた。他に何かご意見はないか。

永岡委員 私は、3人の子どもの生まれてからずっと読み聞かせをしていたが、1人だけしか本を好きにならなかった。その子は今も本が好きで、ずっと読んでいます。漫画を読んでいても、そこで吸収することがすごくあって、本はいろんな影響を与えてくれると思っています。

今、1歳半と3歳児健診の仕事に行っているが、保育士が子どもたちに読み聞かせをしており、子どもたちはきらきら目を輝かせて、よく聞いている。

大津教育長 今日のテーマが「ニーズに応じた図書室運営の充実」ということで、最初、読書習慣を身につけると言った時に、二十歳ぐらいからとかスタートって言うのは厳しいのかなと思う。

例えば、今度友達の結婚式でスピーチをしないといけない。昔だったら本屋さんに行ってスピーチ全集とかを見たり、図書館だったり。今だと、スマホでパッと疑問を解決してくれる。イベント的な、楽しい雰囲気、武雄みたいなコーヒーも飲めるような、そういう形にしていけないと、行った事ない人を集めるのは難しいと思っている。

もう一つ、この前まで話題になっていたのは読む習慣。

5年先、10年先を見据えて増やしていくと言う事で、幼児期、小学校の低学年くらいで、そういう習慣を身につけさせて、それをずっと維持していけば、その子らが高校、20歳を過ぎても、読むだろうと言う考え方も一つかなと思う。

林田生涯学習課長 やはり若い世代が少ない。

忙しい時間の中で、どれだけ図書館、図書室に寄ってもらうというのが非常に大きなところかなと思う。

それには、図書館が一つの居場所と位置づけられるところが、一つの入り口かと考えている。読書に限らず、心を休める場所とか、多目的な利用を謳い文句に出せば、新たな読書習慣に繋がるような世代が増えていくのではないかと考えている。

小松教育次長 冒頭に駒田委員が言われた、市民の2、3割しか利用されていないのではない。残りの7割、8割の方をどう図書館に振り向けせるかというところが、これからの課題だと思うが、特に利用が少ない若者をどうやって図書館に足を運ばせるかというところが課題と思う。そこについて、こういった取組はどうだろうかとか、委員からあればお願いし

たい。

金澤市長 利用人数や貸出数を増やすのが目的だったら、その話をするべきだと思う。ただ、図書館というものが利用人数や貸出数を他の自治体と相対的に競う場ではないと言う人も当然おられる。ですから、他所と比べた時に少なかったら、確かに教育委員会とすれば調子悪いというのも良く分かる。

それより、与えられた環境しか持つ事の出来ない年齢層の子どもたちに、どういう環境を与えられるのかと言う事に力を注いだ方がという印象を持つ。

雲仙市で読み聞かせをやっておられる方は、本当に熱心である。この前も、昔の民話を絵にしたものを作られていて、昔のを引っ張り出して持ってきたので、途中無くなったりなんかしているものだから、教育委員会も、倉庫機能を欲しがっておられるので、きちんと収集して保存してやるとか、記録に残しておくとか、そちらにエネルギーを注いだほうが良いのかなと。

あんまり軽々には言えないが、いろいろご意見を承れればと思う。

大津教育長 地域の話というのも、読み聞かせの中で子どもたちにも自然といくかなと。

またその読み聞かせしたものから、読書の楽しみというものを見つけていく。

そういう形での取組が出来ないかなというのを感じた。

例えば河童伝説とか、ここの山にはタヌキが人を化かすとか、私も近くのところでそういうのを聞いたことあるが、そういうのを作り上げると、一石三丁ぐらいな感じにもなると思ったところである。

永岡委員 今言われたように、地域のものを一つにするということはすごく子どもたちも興味があると思う。

昨日、長崎新聞に平和教育のことが載っていた。小学校に行くと、子どもたちは自分の地域で何が起きていたかということにすごく興味を持っていた。

だから、先ほどの民話とかを作りあげていったら、子どもたちは紙芝居大好きなので、それをエプロン(番組名)でされている方もいたので、プロの読み聞かせの方のご意見も聞いて作っていけば楽しいと思った

大津教育長 伊万里市のどこかの地区で、家読の町という看板が大きく掲げてあった。

家読は七か条の中にもあるので、こっちの方も少し力を入れて考えてやっていきたい。

駒田教育長職務代理者 別件になるが、先程の年代別の図書館・図書室の利用等について、小学生までは本当に利用も結構ある。

中学生になると、ぱったりと止まってしまうが、グループで時々来ていた。何故かというと、

定期テストの前に勉強しに来る。高校生になってくると、個人で図書館に来るようになる。一般の方も、個人で来る。これはみんな目的が学習である。

だから、個人学習をできる場をもっと充実されたほうがいいと思う。

図書館・図書室で勉強してくださいと言うような、空気づくりも大事。仕事に関わる、あるいは大学の受験に関わるという、一生の大事な場面の手伝いができる施設でもありたい。

読書を好きな人を増やすというのは、なかなか難しいことだが、個別に仕切りがあったりすると、隣の人は知らない人であっても、自分のやりたいことができる。

そういった環境づくりを少しずつ進めていかれたらどうかと思う。

石川生涯学習課主査 以前のとおり学習スペースを開放している。

状況としても、特に愛野は多く利用されている状況である。

国見町図書館も、以前ほどに戻ってきている。利用者数をカードでは取らないので、正確な数字は分からないが、司書の感覚では増えてきているということである。

江川委員 市内の図書館には、いろんな方が利用され何回も足を運ばれる。一般の方もおられると思うが、利用する人は図書館について要望を持ってらっしゃる方も多い。そういった一般の利用者の方に対して要望あるいはアンケートを、各図書館に準備してあるのか。準備してあるとすれば、具体的にどういった要望があるのか分かったら、教えてほしい。

石川生涯学習課主査 リクエストを書く紙と、入れる投票箱がある。それに入れていただいているが、司書も利用者の方と話をし、本の希望を聞かれたりしているようだ。

仁禮委員 子どもが小学生のときに、育友会活動で広報委員をしていて、新聞をずっと作っていた。その中で、親子で読み聞かせしてほしいと思い企画して、桃太郎のお話を吾妻町の方言に作り直して冊子を配り、川床小学校に読みに行ったのを思い出した。民話プラス方言に変えて読んだりするのも、また子どもの興味が湧くので、そういう試みも面白いと思う。

金澤市長 愛の夢未来センターができた時に、図書館で道路側のカウンター席をつくっていたが、車で通るたびにそこが利用が少ないのがものすごく気になっていた。

年数が経ち、あまり気にはならなくなったが、反面、総合支所のロビーの机で、必ず勉強している子どもがいる。ああいうのを見ると、感情的にものすごく嬉しい。

そういう観点から、中もいろいろ検討してもらおうと、少し違う要素も出てくる気がする。

最近、カウンター側は利用しているのか。

石川生涯学習課主査 以前、私が図書室で勤務した時は、結構座っていた。子どもというよりは大人の方とか高齢の方が座って本を読んでいた。夏場は暑いというところもあるかも

しれない。

金澤市長 工夫できるところがあれば、してもらえれば。

小松教育次長 やはり、外から見られるのは好まない方も中にはいらっしゃると思うので、もう少し考えてレイアウトしてみたい。

金澤市長 移動図書館車で雲仙市内の福祉施設を回る時、本を借りられる人の年齢層は高齢の方か。

石川生涯学習課主査 いわゆる老人ホームみたいなところや、障害者施設も回るが、結構な割合で老人ホームが多い。

金澤市長 どういう本を借りられるのか。

石川生涯学習課主査 昔読まれていた小説を改めて読まれる方や、大活字本という、ポイントが大きい本があるが、そういった本とか、あとは園芸とか。老人ホームに入ってらっしゃっても、昔おこなっていた園芸の本とか、雑誌も好まれると伺っている。

大津教育長 読書の効果の中に認知症を防ぐのがあるらしい。

週に1回以上読書をする人が、6年後14年後にその認知力が低下する可能性が低いという、14年ぐらいにわたって調査したところがある。

今日ヤフーを見ていたら、どこかの自治体が聞く読書で締結包括連携を結び、それを聞きながら軽い運動なんかをすると、ものすごく効果が上がると。幼児期から低学年と言ったが、高齢の人にも絶対いいということを思い出した。そういうのも頭に入れながら、今後も図書の推進に取り組んでいきたい。

小松教育次長 本を借りるだけではなく、ちょっと立ち寄って時間を過ごす場所としての図書館の存在というか、そういう場所であるということも大事にしていけたらと考える。

これで、図書についての議事を終了する。

その他について、何かないか。

以上をもって、令和5年度第1回雲仙市総合教育会議を閉会する。

【15：30 閉会】